

幼小連携におけるカリキュラムの開発に関する アクションリサーチ

- 酒井 朗 SAKAI Akira お茶の水女子大学
 ○藤江 康彦 FUJIE Yasuhiko お茶の水女子大学
 ○小高さほみ ODAKA Sahomi お茶の水女子大学
 金田 裕子 KANEDA Yuko 南山大学

1. 本研究のねらい

本発表は、ある国立大学附属幼稚園と附属小学校における連携のためのカリキュラム開発に関するアクションリサーチの報告である。幼小間の連携が強調される背景には「小1プロブレム」といわれる1年生の問題行動の発生が挙げられる。だが幼小連携とは、より広い視野から、両者の間のつながりを意識して指導の改善やカリキュラムの改革を目指す包括的な営為としてとらえるものである。

我々は、上記の校・園での連携教育に平成14年度から現在に至るまで継続的に関わっている。同校・園では幼稚園年長組後半～小学校1年生1学期の移行過程を「接続期」と命名し、その時期のカリキュラム開発を目指して、幼稚園教諭（担当2名）と小学校教諭（4名）が「接続期カリキュラム」部会を編制し、話し合いを重ねてきた。我々はこの部会に参加し、接続期のカリキュラムを開発する際の基本的な視点の確認、その視点に基づく実践の提案、反省、改善という一連の取り組みを支援してきた。

本発表のねらいの1つは上記の取り組みを紹介し、「幼小連携」における課題を解明することにある。だが、本報告がその先にねらうのは、いわゆる「臨床教育学」の方法論としてのアクションリサーチの有効性の検討である。酒井（2002）は臨床教育学とは学校現場が抱える課題に何らかの貢献を果たす中で、教育学自体のあり方を反省し、新たな学問を創造しようとする学問的営為であると指摘した。本報告は、研究者自身が教師と協働して授業の改善やカリキュラム改革に関与するという意味で、教師との協働的なアクションリサーチ（Elliot1991）の一事例であり、臨床教育学の1つのあり方となりうるだろう。参加者相互の話し合い過程を重視する点ではFeldman, Hollingsworthらのアプローチに近いとも言える。

話し合いの過程で、教師たちは相互にどのような議論を行い、そこからどのような新たな気づきと理解の深まりを生じさせたのか。また、その過程で研究者自身はどう関わったのか。報告ではこれらの問いにできるだけ具体的に答えていく。（酒井）

2. 接続期カリキュラムの開発過程

次に「接続期カリキュラム」部会での平成14年度の活動を、前期（1学期）、中期（2学期前半）、後期（2学期後半、3学期）に分け、話し合いの展開と教師の変容を示す。同部会は昨年度合計16回にわたりミーティングを重ねてきた。話し合いにおける話題は、幼小連携の意義、接続期のとらえ方、カリキュラム概念の問い直しなど多岐にわたった。

1) 前期: 接続期へのアプローチとして、当初次の二つのイメージが持たれていた。一つには、幼稚園の遊びと小学校の学びをつなぐということである。二つには、幼から小への環境移行の支援ということである。このことに関して、当初は、小学校のルールが守れない、ハサミや消しゴムがうまく使えないといった小学校側が提起する話題に、幼稚園の教師が、むしろそれが環境移行時の自然な姿であると応じるなど、接続期の子どもをとらえる際のフレームの相違が示される場面もあった。なお、話し合いと並行して「お店屋さん」「動物園」などをテーマとする幼小の交流活動が企画され、実践されていた。

その後、カリキュラム開発において「接続」をどう実現するのかについて話し合いが進められ、接続期カリキュラムでは、活動内容ではなく教師の「思い」のレベルで連続性や一貫性をもたせるという視点がもたらされた。

また、子どもの不適応例として小学校教師が示したいくつかの事例について、再検討・再解釈がなされ、子どもが安心して環境移行を果たすためには教

師と子どもとの関わりや教師の働きかけにおける配慮が必要であり、それを軸にカリキュラムを構成する必要があるという、接続期カリキュラムを構成する上での基本的視点が具体的事例から立ち上がった。

ただし、この段階では学習活動展開と教師や子どもとの関わりとが一つのカリキュラムとして構成されるのかという疑問が残された。

2) 中期: 上記の話し合いを経て、カリキュラムについて、従来よりも広い幅を有するものとしてとらえられるようになった。しかし、ここで二つの課題に直面することとなる。一つは、幼・小双方のカリキュラムを包摂するような一貫したカリキュラムをどう組むかという点である。このことに関する議論の中で、幼小間の指導観や目標観に関する相違があらためて顕在化することになった。二つは、従来のような学習内容や活動の計画的な配置、つまりプランとしてのカリキュラムに「教師と子どもとの関わり」をどう組み込み、どう表現するのかという点である。

他方、それまで幼稚園において、子どもの発達と活動との関連を整理するために用いていた「ステージ表」を基本にできないかという案が小学校側から提案された。ステージ表とは幼稚園で考案されたものであるが、子どもの発達の過程を年齢ではなく個々の子どもなりの発達の姿を、微視的かつ螺旋的にとらえ表現したものである。ステージ表をベースにしたカリキュラムの表現を模索する中で、子ども理解ということを中心に、活動のレベルではなく、ねらいやねがいのレベルで一貫性や連続性が保証されればよいということがあらためて確認され、上記の一つ目の課題については対応の方向性が見いだされた。

3) 後期: 年度のまとめが意識され始めた。2月の公開研究会に向けた議論の中では、「段差をなめらかにつなぐ」という研究課題に対して、段差の意味についてあらためて問う必要性が提起された。さらに接続期カリキュラムを実施するにあたり留意する視点として、「空間」「時間」「教師の関わり」の設定の重要性を確認したうえで、次年度において新一年生の受け入れに関する取り組みを進めることが合意された。

(藤江)

3. 研究者の関わりと変容

最後に、今回の取り組みにおける研究者サイド、とくに中心的な位置を占めたSの関わり方について見ていきたい。これまではアクションリサーチといえども、研究者はどうしても指導的/助言者の立場を

とりがちであった。しかし、今回の取り組みでは、Sは同じ土俵に立ち協働してカリキュラム開発を行うという役割を担おうとした。現場を知らないから教えてもらうという姿勢をとることが多く、専門家としての研究者という立場で接することをできるだけ控える傾向があった。

このような姿勢で臨んだSは、話し合いの回を重ねる中で、次第に幼稚園教諭と小学校教諭のカリキュラムのとらえ方の違い(幼稚園:生活全て、小学校:教科に分けて考える一なかま、かず、ことばの範疇に入れられるものがカリキュラム)を理解していった。しかし、見出したことを押し付けるのではなく、教師の側の気づきを促すための手立てを検討し、その手立てによる介入とその際の話し合いの過程を大切にしている関わり方に徹した。

例えば、幼小連携のねらいを小1プロブレムの解決としてとらえる小学校側の見方が強調された際には、幼稚園教師へのインタビューを行い、幼稚園の考えに耳を傾けた。また、相互に子どもの活動への参加の機会を設けたり、同じ場面を見て話し合うために、ビデオカンファレンスを設定したりした。

このような関わりを通じて、部会メンバーは接続期の取り組みは、単に小学校に適応させることだけが目的ではないという理解に到達し、接続期の具体的な提案を検討できるようになった。カンファレンスのまとめにおいて、Sは「接続期をどう考えるのか、カリキュラムの問題、その前段階として、教師と子どものかかわり、入学式~1, 2ヶ月の受け入れの具体的な提案をしていこう」と述べている。

また、10月には他の幼小連携実践校・園の見学を企画し、共に学び、それぞれの得たものを話し合う機会をもった。その中で、S自身もカリキュラム開発を実践から理解していくようになる。Sは「お互いに話し合うこと、お互いに見合うこと、その中でお互いの違いを認識しつつ、その上で、ではどうしたら歩み寄れるかを考えること」を大切にしてきたと振り返っている。

このように今回のアクションリサーチでは、話し合いが深究の中心的な場であり、そこで、教師と研究者がお互いに理解しあい、有効な経験や知識を出し合い学びあい、それぞれが変容し、カリキュラムの生成の場となっていた。結果を求めるのではなく、話し合いのプロセスそのものが、アクションリサーチにおける相互の理解の要であり、意味あるものとなっているのである。

(小高)